

---

# 神は心の涙を流がす

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神は心の涙を流がす

### 【Nコード】

N8767B

### 【作者名】

並盛りライス

### 【あらすじ】

千里はクールだ。彼女が居なくても僕は生きているし、僕が居なくても彼女は生きていけるだろう。

息苦しい。濁った世界の中で、僕は呼吸すらできやしない。神は

……

気付いたら雨は止んでいた、風はまだ冷たかったけれど、空調の生温い風よりちよつと良い。

「寒くないか？」

「全然ヘーキ」

「だと思った」

獣の鳴き声が聞こえる。遠いようで近いような、距離感の無い喚き声。

時々、眼だけが異様に発達した僕らには見えない何かが蠢いている。

授業の早く終わる日はいつも決まって、千里とご飯を食べに行き、その足で千里の家に行く。気分にもよるが大抵は寝るか酒を飲むぐらしいしかやることはない。

寒い日が続くと、僕は布団の中で、胎児のように丸まって眠った。

「これから会える日が減るかも」

「全然ヘーキ」

「それを言われると僕は辛いよ」

「嘘々、寂しいね」

「全然ヘーキ」

「強がり君の専売特許だし、寂しがりは私の本音だし」

千里はクールだ。演技でも僕を楽しませてくれる。

僕が居なくても千里は生きていけるし、千里が居なくても僕は生きていける。

寄り添って眠っても朝になれば、僕らは別々の方向を向いている。

ほとんど無意識に、僕らの足はいつものラーメン屋に向っている。雨上がりの街は、キラキラと光を放ち、暖簾を潜った僕たちの熱気に当たった頬は微かな熱を放つ。

「おじちゃん、いつもの」

「僕も」

「おう、今日もサボリか？」

「休講ですよ、いつもサボってる訳じゃないです」

店内は、こびりついた油の臭いで包まれている。葱ラーメンとチヤシュー麺が二つ、目の前に並ぶと、僕らは同時に箸を割った。

「いただきます」

古い冷蔵庫のカタカタした音と、ラジオから流れてくる野球中継が入り混じる。

勿論一人で来る事もあるけれど、千里と一緒に来るのが大半だ。

千里が食べ終わるのを待つ間、野球の中継を聞いていた。勝っているのがどちらのチームで、負けているのがどちらのチームかわからない。それでも誰かがホームランを打ったのが分かった。

お金を払って外に出ると、暗くなっていた。もう四月になったのに吐いた息が白くなった。

「あつ」

「どうした千里」

「あそこ、あそこ見て」

雨で増水した川の真ん中に、少しだけ盛り上がった島がある。そこに、真っ白い猫が取り残されて居るのが見えた。

「やばいな、もうすぐダムが開いたら、助からないかもしれないな」

「流れが急過ぎて、泳ぐのは無理よ」

「危ない事すんなよ」

橋の上から川を覗き込む千里に、僕は言った。

「しないよ、でも可哀相だね」

「そうだな」

千里は猫を見ているが、僕は千里を見ていた。千里の顔は真剣だ

った。

「あつ」

「危ない！」

白い猫は一瞬で、黒い濁流の中に消えた、その白さが妙にはつきりと眼に焼きついていていた。

猫一匹分の体重がこの世界から消えてしまったのだ。

「猫……死んじゃったね」

横にあるのは、いつもの千里の顔だった。

「寒くないか？」

「全然ヘーキ……じゃないかも」

僕らは涙さえ流さなかった、心の中で何かが痛いと呼んだ。それほど一瞬で一つの世界が消滅していくのだ。

暫くの間、僕らは真っ黒い川底を凝視していたが、やがて同時に歩き出した。

「寒いよ」

と千里が呟いて、強がりでも冗談でもなく僕の口は自然に動いた。

「結婚しようか」

と思わず僕は溢していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8767b/>

---

神は心の涙を流がす

2010年10月9日21時22分発行